

教育のフロンティア

NO. 187
2012. 10-11

NPO法人 北海道自由が丘学園・ともに人間教育をすすめる会
(振込先:郵便局 02790-6-9847 北海道自由が丘学園をつくる会)
〒062-0051 札幌市豊平区月寒東1条15丁目5-11 TEL(011)858-1711 FAX(011)858-1333
URL <http://www12.plala.or.jp/hokjioka/> →変更:www.hokjioka.net E-mail: codmokan@agate.plala.or.jp

定価:250円、年額:3,000円(送料込)
*会員は会費(支援金)を含む



《写真説明》今回、大学生との実習の2日間は余市教育福祉村にて。
◇炭焼きの合間にフィールドレク~2チームが、葉、枝などを集めてボードに貼り付けました

■■ INDEX ■■
P1:巻頭言
P2:ヒューマンイラスト/普及活動、会費納入他
p3:「授業検討レポート」
p4-5:「大学生実習」
p6-7: ↓ 子ども館
p8:時事、スケジュール他

「学びが心を解き放つ」

自由の森学園 高校長 鬼沢 真之

いまの子どもに何が欠けているか、たけているか、という議論をしても仕方がないと思う。この学校にはいろんな子が入ってくる。各界で活躍する先輩にあこがれたり、公教育や大人に不信感を抱いたり…。

「学校って楽しいところだったんだ。学ぶってこんなに嬉しいことだったんだ」と実感してもらうことが第一。「やりたいことは目一杯やりなさい」「楽しむ時は心おきなく」と見守ってやる大人がいれば、子どもは自分を出せる。校則はない。人を殴るなどか人のものを取るなどか、そんなことは人間として当たり前。謹慎や退学もある。一つの共同体である以上、その営みを破壊する行為は許されない…(中略) 教員としてかけだしのころ、生徒に受ける授業、生徒をつなぎとめられる授業を必死に考えていた。でも、鍛えられるのは教師だけ。受身の生徒は変えられない。生徒が教師の品定めをするのはおかしいと思えた。

この学校は、教師が自分の責任でカリキュラムを考え、授業を構成する「自由」が土台。だが、生徒が目を輝かせる授業をいつも作れるわけじゃない。授業という場を構成していく責任は生徒の側にもある。授業は、生徒と教師が共に作るものだ…(中略) 子ども達の考える自由は無限にある。学ぶことで心が解き放たれる実感を持ち、「自由」を感じればよい。

言われたことをよく聞く社員、四角四面の大人を育てても、これからの社会では生き残れない。自分で感じ、考えられる、のびやかな人間を育てたい。

(注:新聞記事を本人の了承を得て記載します。筆者は以前、自由が丘教育集會にも来訪されました)

教育大学生実習「授業検討会」より

2012.9.25 鈴木秀一

【授業1:「目の与える印象」から】

第一に言いたいことは、教科書を教える、教科書にあるから教える、という感覚から抜け出すこと。こんなことに子ども達が気づいてくれたらいいのだがとか、こんなことを一緒に考えたい、作ってみたい、ということをお大事にすることです。本授業もきつこういったことから始まったと思います。

赤ちゃんの目と大人の目の写真を示して、なぜ赤ちゃんを可愛いと思うか、それは目が大きいから、に始まり、漫画2種類の目の違いの感じを書かせるとか、要するに目が顔の表情の中心で、人間関係をつくる上で大きい役割を果たすということを考えさせたい、という授業でした。ただ、上で述べたように考えていくとき、大事なのは、なぜ自分はこんなことを考えさせたいと思ったのか、作りたいと思ったのか、と問い直すことです。こういうことを考えれば、今、子ども達の考えたり、大事と想っていたりすることを、こう変えていけば、成長するのを援助できるのではないかと、いった子どもの今の心情・思考・技術・価値観などを変えて伸ばしていけるかどうかを再吟味してみることに(です)。

今のスクールの子たちが、「目」を手がかりにして、自分たちが抱えている問題を解くことができるのか、といった見方をしてみる事が大事ではないか、と思うのです。目が与える印象というより、子ども達の目は曇らされていないか、とか、目を見合うことで、本当に深い人間関係が生まれるのか、といったことを掘り下げて見たいという気持ちを生じさせることができたかどうか。

小学校時代の恩師渡辺鷹治先生が、子どもに本当の事を言わせるとき、「先生の目を見る」「いまいったことは、ウソではない、本当だと言えるか。先生の目をまっすぐ見て、もう一度、言ってみろ」と言っていた記憶があります。ウソを言うとき、どうしても目がきよきよと動く、まともに相手の目を見られない、ということなどもとりあげられればなあ、と思いました。[かきもとひでき(昭55当時、神戸の小1の子の詩)もう わるいこと せいへん]



【授業2:「炭と木材の違い」から】

院生/三浦さんの1時間目の授業は、子ども達に観察力、思考力をつけてやりたい、と考えて作られた授業と言えます。観察では、実物を観察させる、比較して観察する、という基本的な観点が立てられていましたし、考えさせる点では、具体的な実験を見させて、考えるきっかけ、材料を与えて考えさせるということを土台としており、よく準備された授業ですが、割り箸と炭化したその重量を測って比べるということを省略したのは残念な気がしました。重量変化がわかっていたら、炭化により木材から出ていったものがあつた、とか、それは何だったのかなどと考えるよいきっかけになったと思います。もっとも、子ども達の多くは、炭化によって水分が失われた、と考えることができていました。数値で確認する作業は大切です。

アルミホイルで割り箸をくるんで炭化させるとき、出た煙が白色ということにも注意させれば、(白色の煙は水蒸気、製鉄所の赤い煙は酸化鉄の微粒子、黒い煙は不完全燃焼の炭素)水分が出て行ったことを、よりはっきりつかめたいと思われれます。炭化の際の「炎」の説明は、どうすべきか、木材に含まれるどんな可燃物がガス化して炎になるのか、も聞きたいところでした。(以後、3回の授業・実習)

【授業3:「性的二形論」から】

内容がとても豊富だった上に、クワガタオス・メスに扮した人が登場して、クワガタの顎をどう使ったかの子ども達の予想に合わせた演技まであって、盛りだくさんのご馳走攻めにあつたような授業でした。戦略論的進化論の観点での授業プランづくりは、教育内容・方法研究室の継続的な研究テーマで、この授業も、その路線に沿ったものと思います。その点で、環境への適応を問題にしたチョウチンアンコウのところ、とくに面白く思いました。子ども達も雌雄の大きさの違いを環境と結びつけて理解しようとしていました。また、クワガタのオス・メスそれぞれの顎の役割を、やはり環境と関わらせながら、食を得るための役割から理解させようとしている点も、興味深く感じました。

孔雀の問題や配ったシートはどんな意図だったのかよくつかめません。それと広い黒板がないためもあるのですが、板書がごちゃごちゃして、字がきれいにはっきり書かれなくて、この点は他の授業でも同様に感じた点です。